

IMSAC 2025 国際諮問委員会開催

2025年10月3日、分子科学研究所 国際諮問委員会 (IMS Advisory Committee 2025) を開催いたしました。本委員会は、研究所の組織体制と運営を評価するとともに、今後の戦略的方向性について国際的な視点から助言をいただくことを目的としています。

委員会メンバーとして、菊池昇座長 ((株)トヨタコンポ研究)をはじめ、Mischa Bonn (マックス・プランク高分子研究所)、David A. Leigh (マンチェスター大学)、James M. Lisy (イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校)、David E. Manolopoulos (オックスフォード大学)、Matthias Weidemüller (ハイデルベルク大学)の6名をお招きしました (敬称略)。会議はオンサイトとオンラインを併用したハイブリッド

形式で行いました。

委員会では、まず13の研究領域・施設・センターの主幹・施設長より活動実績をご報告いただき、続いて渡辺所長から分子研の現状と戦略的取り組みについて概説がありました。その後の包括的討論では、委員の先生方から率直なご意見を数多くいただきました。

議論では、分子研の研究水準が世界最高レベルにあることが高く評価される一方、構造的な課題も指摘されました。具体的には、研究グループの規模、部門内外の連携、教員の後継者確保、大学院生の獲得、UVSORの将来戦略などが主なテーマとなりました。委員の先生方からは、研究者間の連携を深め、分子研全体として相乗効果を生み出す組織づくりの重要性が繰り返し強調されました。



委員会での議論と事後にいただいた追加コメントをもとにAdvisory Reportを取りまとめ、菊池座長より渡辺所長にご提出いただく予定です。

これからの分子研の研究組織に関する議論も開始されました。50周年を迎えた分子研が本報告書の提言を活かし、次の50年に向けてさらに発展することを期待いたします。最後になりましたが、委員会の準備・運営にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

(解良 聡・志村 真希 記)

International Workshop for Young Scientists on Crystalline Organic Materials (YSCOM2025)

報告：東北大学多元物質科学研究所 出倉 駿

9月26日から28日の3日間にわたり、岡崎コンファレンスセンターにて有機固体分野の若手国際ワークショップ [International Workshop for Young Scientists on Crystalline Organic Materials (YSCOM2025)] を開催した。本ワークショップでは、後述する広義の「有機固体」の研究に携わり、化学・物理・計算・材料の多様なバックグラウンドを有する国内外の大学院生・若手研究者が一堂に会し、最先端の研究発表と活発な議論が

行われた。

有機固体の分野には「有機固体若手の会」という、特定の学協会等の上部組織を持たない若手研究者・学生主体の団体が存在し、「有機固体若手の学校」と称して国内向けの若手研究会を定期的で開催している。筆者は2022年度より「校長」という立場で若手の学校の主催・運営に携わってきた。有機固体若手の会は、元々は分子性導体の分野の若手研究者を中心とした団体であるが、分子性導体の分野は合成化学による分子・結晶構造の発見や最適

化、実験的物性物理による電気伝導性・磁性・誘電性・光機能性等の開拓、理論・計算による機構解明・予測、材料科学によるデバイス活用などの、異分野間の交流によって発展してきた歴史がある。一方で、近年では対象分子・物質の多様化、最先端物理の先鋭化、さらにはコロナ禍を境とした人的交流機会の減少も相まって、当該分野の将来を担う若手研究者同士の国際的かつ分野横断的交流の機会は益々その重要度を増している。そこで近年では、「有機固体」を従来の分子性導体に加え、オリ

ゴマーや配位性高分子等を含む物質群として広く捉え直し、関連研究を行う学生や若手研究者を対象に若手の学校を開催してきた。

今年度は、分子性導体分野の代表的な国際会議である International Symposium on Crystalline Organic Metals, Superconductors and Magnets (ISCOM2025) が国内で開催されることから、例年の国内向け若手の学校ではなく、ISCOM2025のプレカンファレンスとして、若手国際ワークショップ YSCOM2025 を開催する運びとなった。ワークショップには計34名の若手研究者が参加し、その過半数が大学院生であった。期間中は、海外からの口頭講演2件を含む口頭講演20件(うち、大学院生の口頭発表9件) およびポ

スター発表13件を行い、会場では連日白熱した議論が交わされた。懇親会でも多くの参加者が交流を深め、国内外の異分野の若手研究者同士に濃密な学術交流の機会を提供できた極めて有意義な若手ワークショップとなった。

最後に、本ワークショップは分子研研究会の支援を受けて開催させて頂い

た。分子科学研究所の山本浩史教授および山本グループスタッフの皆様、また世話人を務めてくださった杉浦菜理助教(東北大金研)、横森創助教(茨城大)、今城周作准教授(東大)をはじめ、本ワークショップ趣旨に賛同、ご参加頂いた全ての皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



分子研研究会「2050年の生体分子科学を語る」

報告：協奏分子システム研究センター 秋山 修志

去る2025年10月21～22日、分子研研究会「2050年の生体分子科学を語る」が開催された。かつて分子研教授として北川禎三先生(故人)が中心的な役割を果たされた分子研研究会「2010年の分子科学を語る(1998.10/19～21)」を参考に、5名の世話人(神取秀樹教授@名工大、水谷泰久教授@阪大、石森浩

一郎教授@北大、飯野亮太教授@分子研、筆者[秋山修志]@分子研)で本研究会の企画・準備を進めた。

本研究会は一般的な研究発表の場ではなく、各演者が未来(25年後)の夢を語り、そこにシニアや若手の研究者が加わって「2050年の生体分子科学をみんなで語る」ことを目的とした場

である。よって本研究会の招待講演者については、まず生体分子科学コミュニティを牽引してきたシニア世代に候補者の推薦を依頼し、そこから25年後も現役(語った夢の実現可否を独自に検証し得る)であろうことが見込まれる35～40歳前後の世代を中心に18名を選考した。

講演者リスト(継承略)

八木 清(筑波大)
井上圭一(東大)
柴田幹大(金沢大)

北岸宏亮(同志社大)
大洞光司(阪大)
庄司光男(筑波大)

近藤 徹(基生研)
梶本真司(東北大)
田村朋則(京大)

森 俊文(九大)
小杉貴洋(分子研)
新津 藍(理研)

梁取いずみ(京大)
森本祐麻(東京科大)
堀谷正樹(佐賀大)

齋尾智英(徳島大)
片山耕大(名工大)
大友章裕(京大)

詳細は <https://www.ims.ac.jp/research/seminar/images/bms2050.pdf>

